

令和元年6月21日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H05729

研究課題名(和文) 日系ブラジル人の再チャレンジの探究 トランスマイグラントの時代における教育と就労

研究課題名(英文) Inquiry to carrier development and education by Nikkei (Japanese) Brazilian returning to Brazil.

研究代表者

林 寄 和彦 (Hayashizaki, Kazuhiko)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10410531

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本で教育をうけた日系ブラジル人たちのブラジルでの再適応の実態についてあきらかにし、その環境的な要因や諸条件を考察した。なかにはブラジルで大学(院)を卒業したり、職業的なキャリアをつんだり、起業で成功したりなど、日本にいたと仮定した場合よりも、能力を発揮していると想定しうる者が一定数いた。その要因には、日系ブラジル人という二面性や多言語能力(トランスマイグラントとしての特徴)をいかせる経歴や、ブラジルの諸制度・社会のたすけがあった。とくに、ひらかれた教育と日系企業の雇用ニーズは都市の日系の若者に有利にはたらいていた。他方でブラジルの不景気と日本の人手不足は再度の渡日を促進していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日系ブラジル人の先行研究は、教育・就労・医療・福祉等のどの分野においても、かれらを定住化しつつある入移民としてとらえて、日本社会への統合の課題を考察してきた。本研究はかれらをトランス移民としてとらえ、統合されるだけの存在ではない独自の特徴を、文化・アイデンティティ形成、被教育経験、進路・就労状況、家族形成においてあきらかにした。また社会的にも失敗であり、かれらを不幸にするだけとかがえられてきたブラジル人のデカセギが、社会やブラジル人双方にメリットをもたらしていること。さらには実例をつうじてブラジル社会やデカセギのメリットが前景にだされたことは、人々の認識をかえうる意義もおおきい。

研究成果の概要(英文)：This research revealed how Nikkei Brazilian transmigrants educated in Japan did adapt back to Brazil society and inquired into the environmental factors and conditions of their re-adaptation. Some of them in Brazil graduated from universities (several even from post graduate), developed their good carriers in companies, started up their own business and those youth were thought to perform their better potential than when assumed that they would still have stayed in Japan. Behind their success we found that there were their dual nature and bilingual (sometimes trilingual) ability of transmigrants and that Brazil's social system and culture also helped. Especially, good accessibility to education and Japanese company's demands for human resource worked as good advantage to people in a big cities. Some were encouraged to come back to Japan due to the Brazil's long recession and Japan's workforce shortage.

研究分野：教育社会学

キーワード：トランスマイグラント 往還移民 循環移民 デカセギ 日系ブラジル人 移住労働者 トランスナショナル 日系企業

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

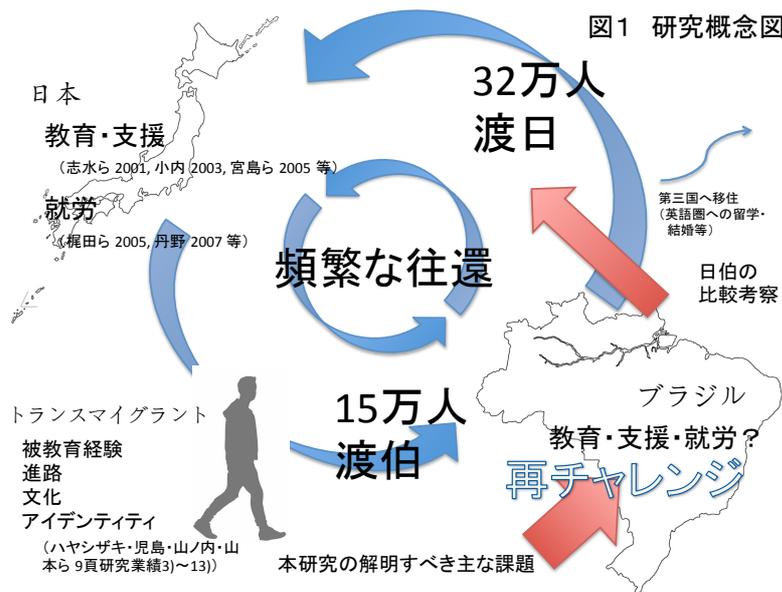
### 1. 研究開始当初の背景

リーマン・ショック以後、大量の日系ブラジル人が日本からブラジルに帰国し、日本に32万人いたブラジル人は17万人にまで減少した。2014年にはじまるブラジルの不況と日本の人材不足はこのブラジル人の帰国現象をせきとめてはいるものの、4世以後の日系ブラジル人の日本への定住を抑制しようとする査証制度のため、日本にくるブラジル人は微増にとどまっている。

こうした査証制度ができた背景には、「デカセギの子どもは不幸になる」というまちがった社会通念があった。もちろん、日本のうけいれ体制に不備があるのは問題ではある。しかし、わたしたちのグループがおこなってきたブラジルでの調査では、もどってきた日系ブラジル人の子どもたちが教育や就労で失敗しているわけではないことをみいだしてきた。研究開始時点ではブラジルにもどった人々について、とくに日本で教育をうけた人々の再適応にかんする調査はわたしたちの研究グループをのぞけば存在しなかった。わたしたちはデータをあつくる必要があり、さらにかねらの社会的・経済的・文化的な背景にさらにせまる必要があった。

### 2. 研究の目的

前身のプロジェクトであきらかになったように、日本-ブラジルを移動してきた若者は、ブラジルでは(たとえ日本で学歴がひくくても)そのトランスナショナルな特性をときにいかしながら、日系企業で高収入の仕事についていたり、大学に進学したりなどの敗者復活を実現しているものが少なくなかった。私たちは、ブラジルという国は、彼らにとって再チャレンジしやすい環境にあるのではないかという仮説をもつにいたった。そこで本研究は、前身のプロジェクトの個々人のライフストーリーの収集の幅をひろげるとともに、その仮説の検証を目的として、①学校教育・教育支援、②補習教育・ノンフォーマル教育・自助グループ、③就労機会・労働環境、④それらにおける価値・文化・アイデンティティに焦点をおき、日本-ブラジルの比較社会的視点で再チャレンジを支える環境の実態を探究することとした(図1)。



本研究は、前身のプロジェクトの個々人のライフストーリーの収集の幅をひろげるとともに、その仮説の検証を目的として、①学校教育・教育支援、②補習教育・ノンフォーマル教育・自助グループ、③就労機会・労働環境、④それらにおける価値・文化・アイデンティティに焦点をおき、日本-ブラジルの比較社会的視点で再チャレンジを支える環境の実態を探究することとした(図1)。

### 3. 研究の方法

研究方法としては、研究者をグループにわけ、日本とブラジルを往還するブラジル人の青年の人生についてききとりをおこなうと同時に、各機関や団体ごとのケーススタディを作成していく。インタビュー調査を主な研究手法とするが、状況が許せば参与観察や撮影、現地での資料収集もおこなう。結果的に、サンパウロ市、サンパウロ州の都市、近隣の州の都市(パラナ州ロンドリーナ、ミナスジェライス州ベロホリゾンチなど)を主に調査するグループと、ベレンやトメアスなどの北部の地方都市を調査するグループにわかれた。

### 4. 研究成果

本調査はブラジルにもどった若者たちが、教育や就労で苦勞をしつつも、それをのりこえていく物語をおおきみいだした。

#### (1) ライフ・ストーリー収集の継続

青年へのインタビューからは以下のことがあきらかになった。

- ・以前のプロジェクトでは、はたらきながら大卒資格をとる人をおおきみいだしたが、それらのなかで、さらに大学院に進学している人々をすくなくみいだした。
- ・ブラジルに帰国後、高校にかよう人々がおおい。または、高校を日本でおえるとブラジルでの生活がむずかしくなるとして、子どもの中学卒業以前に帰国をきめる一定数の人々がいる。
- ・ブラジル経済の不調のため、または、日本への親近感やみずからのアイデンティティの再確認をへて、日本にもどる人がふえている。また留学や旅行という形態で一時的に日本に帰還をはたす人もいる。
- ・子どもがいる場合、バイリンガルにそだてようとしたり、日本の文化を継承していこうとする人々がおおい。

- ・地方では就労の困難がおおいが、都市では日系企業をはじめとする安定した企業・学校・団体ではたらく人々があり、また過去の経験等をいかし、みずから起業するものがおおかった。
- ・ブラジルで就労や社会への適応にもがく人々もあり、なかには困難をのりこえたのち展望をみいだす人々がいる。
- ・家族形成が日本へまたはブラジルへの移住のおおきな理由となっている場合もおおい（親とくらす、恋人がいる、子どもを〜でそだてたい）。

## (2)企業や団体への調査

日系企業や団体へのインタビューからは、企業ごとにことなる日系の人材へのニーズ、ブラジル企業の構造、給与体系、労働法、勤労文化、手あつい待遇などが明らかになった。日系の人材へのニーズは多様であり、日本との通商のため日本語ができる人材を必要としたり、管理部門に駐在員がおおく通訳を必要としたり、「まじめさ」を重視して日系人や日本がえりの人をこのんで採用したり、優秀なエンジニアをあつめると自然に日系人の割合がたかくなっていたり、日系の人材会社をつうじて採用候補者をしばったり、グローバルな人材育成をしているなど、さまざまなものがあった。それらの会社ではたらく人々のなかには、日本的な勤労倫理・勤労観をもつ人がおおく、それは日本での就労経験とは無関係にあった。日本的な勤労観が評価されて管理部門へとのおぼる人も多々みられた。

## (3)教育機関への調査

成人教育機関への参与観察、訪問、有識者からのききとりからは、ブラジルでの学び直しの条件が日本よりもはるかに柔軟であり、おおくの人びとの高卒・大卒・大学院資格取得へとむすびついていることが再確認された。とくにブラジルでは、高等教育の大衆化にともなって、大学の三部制（特に夜間）、学費の月額制、無償での休学、インターン制、通信制、非年齢主義的な文化など、就労しながらまなぶ体制がととのっている。またその大学教育でもグループによるプロジェクト遂行形式がまなびへの自信をふかめる装置になっていた。さらに高卒資格をえるための方法も多様に準備されており、その利用者もすくなくはなかった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2件）

- ①山野上麻衣, 2019, 「ブラジル人の子どもの学習支援を通してみえてきたこと」, 『別冊 環「開かれた移民社会へ」』第24巻, pp. 262-266., 藤原書店, 査読なし.
- ②山本晃輔, 中島葉子, 児島明, 2019, 「移動とともにある再チャレンジ: アマゾン流域部の日系ブラジル人の事例から」『未来共生学』第6巻, pp. 229-261., 大阪大学国際共創大学院 学位プログラム推進機構 未来共生イノベーター博士課程プログラム部門, 査読あり.

〔学会発表〕（計 4件）

- ①山本晃輔, 中島葉子, 児島明, ハヤシザキカズヒコ, 山ノ内裕子, 山野上麻衣, 2017, 「日系ブラジル人の再チャレンジ—アマゾン編—」, 日本教育社会学会第69回大会(於:一橋大学).
- ②ハヤシザキカズヒコ, 山ノ内裕子, 山野上麻衣, 児島明, 山本晃輔, 中島葉子, 2017, 「日系ブラジル人の再チャレンジ—サンパウロ・ロンドリーナ編—」, 日本教育社会学会第69回大会(於:一橋大学).
- ③山野上麻衣, 2017, 「移動する生からみる日本の教育・就労(1)—ブラジルに帰国した人びとの主観的な意味づけから—」, 日本社会学会第90回大会(於:東京大学).
- ④ハヤシザキカズヒコ, 2017, 「移動する生からみる日本の教育・就労(2)—ブラジルにかえる人びとの「環境」についてのかたりより—」, 日本社会学会第90回大会(於:東京大学).

〔図書〕（計 2件）

- ①赤尾勝己, 多賀太, 山ノ内裕子, 広瀬義徳, 若槻健, 大野 順子編著, 2017, 『学習社会学の構想』, 晃洋書房, 総232ページ.
- ②榎井縁, 志水宏吉, 宮島喬, 山本晃輔, 山野上麻衣, et al., 2017, 『外国人の子ども白書—権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から』, 明石書店, 総320ページ.

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名: 山ノ内 裕子

ローマ字氏名：Yamanouchi Yuko

所属研究機関名：関西大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：00388414

研究分担者氏名：児島 明

ローマ字氏名：Kojima Akira

所属研究機関名：鳥取大学

部局名：地域学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：90366956

研究分担者氏名：中島 葉子

ローマ字氏名：Nakashima Yoko

所属研究機関名：岐阜聖徳学園大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30637872

研究分担者氏名：山本 晃輔

ローマ字氏名：Yamamoto Kosuke

所属研究機関名：大阪大学

部局名：人間科学研究科

職名：招聘研究員

研究者番号（8桁）：30710222

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：山野上麻衣

ローマ字氏名：Yamanoue Mai

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。